

意識の神秘

生物学的自然主義からの挑戦

本書は哲学者サルバーが「心―脳と精神の根本理論を求めて」などで、これ「ニューヨーク・レヴュー・オブ・ブックス」誌上から日本でも全て翻訳され掲載した書評と著者たちとの往復書簡を収めたものである(原著は一九九七年刊)。書評の対象となつてゐるのは、フランスス・クリック『DNAに魂はあるか―驚異の仮説』、ジェラルド・エーデルマン『脳から心へ―心の進化の生物学』、ロジャー・ペンローズ『心の影―意識をめぐる未知の科学を探る』、タニエル・デネット『解明される意識』、デイヴィッド・チャルマーズ『意識す

件がそうば、因果的に「意識」という現象を生じさせる。そのような意識は一人称的な「存在」として実在を構成し、われわれはそれを、クオリアをもつて認識できる。意識という一人称的存在は三人称的な存在によって因果的に生成されるという。彼の説の特徴は、その因果概念にある。唯物論では、因果関係が成立するのは物理的実在同士

た、サルバーは、後年(評者た、チャルマーズの議論では結局、背理法が背理法ではなくなり、ゾンビが可能であるといったばかりか、い帰結になるという。つまり、現実の世界の物理的構造が分子に至るまでこの現実とまったく同じでも、われわれのように意識を持たないゾンビは可能だということになる。これを誰が信じるのだろうか。昨年翻訳されたコッホの『意識をめぐる冒険』では、チャルマーズとは賛同は、今日改めてサルバーは、コッホの試みに対する注目の炯眼ぶりを示すものであり、本書の翻訳の意義は大変大きい。また、訳文は明解でわかりやすく、本書は大変優れた訳書といえよう。(菅野盾樹監訳/笹倉明子・小倉拓也・佐吉仁志・小林卓也訳)(みやはらいさむ氏名古屋大学大学院教授・哲学専攻)

深く隠されていた哲学者たちの病巣をえぐり出す

宮原 勇

『心』の影―意識をめぐる未知の科学を探る』、タニエル・デネット『解明される意識』、デイヴィッド・チャルマーズ『意識す

しかあり得ないが、サルバーは、そのような因果概念も唯物論も否定する。むしろ、サルバーは、意識というものの存在を認めつつ、脳科学によって意識の発生を解明しようとするクリックやエーデルマンを評価する。クリックはクリストフ・コックと共同で「NCC」(意識の本と共同)を証明しようとしてい

★ジョン・R・サルバーはカリフォルニア大学バークレー校教授・哲学者



四六判・270頁・3200円
新曜社
978-4-7885-1421-8

説を証明しようとしてい

など。一九三三年生。